

校訓 「高い理想 清い心 熱い想い」 文責 校長 中原弘之

学校教育目標 「学校と地域を愛し、知・徳・体の調和のとれた児童の育成」

食べることによるからだづくり

1月24日から30日は、全国学校給食週間でした。インフルエンザ感染予防のため、給食集会は、予め録画しておいたものを各学級のテレビモニターに映して実施しました。また、放送による児童作品の発表などを行いました。

バランスのよい食事により、病気にかかりにくいからだをつくることができます。給食の残量からは、子どもたちが給食をよく食べていることがうかがえます。手洗い・うがい・マスク・睡眠・休養などに加え、しっかり食べて栄養を摂ることも頑張してほしいです。

「恕」（じょ）の心

孔子が、人生で一番大切だと説いたのが「恕」だそうです。「思いやり」という意味です。小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編には、「思いやりとは、相手の気持ちや立場を自分のことに置き換えて推し量り、相手に対してよかれと思う気持ちを相手に向けることである。そのためには、相手の存在を受け入れ、相手のよさを見いだそうとする姿勢が求められる。」と記載してあります。相手の立場や気持ちを想像し、相手のことも考えて行動する社会を目指して、大人も子どもも「恕」の心を大切にしたいものです。

祇園歴史の旅（その56）「戦争の時代」

佐世保市教育委員会編集・発行 小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』2016年 第6版（改訂版）から引用。

「日本は明治時代以降、外国と何度も戦争を行いました。そのたびに佐世保は海軍基地として重要な役割を果たしました。特に日清、日露戦争では連合艦隊の基地となり、第1次世界大戦では佐世保鎮守府所属艦艇が遠く地中海に派遣されました。現在平瀬町にある市民文化ホールは、このことを記念して建てられたもので、1997年（平成9）に国の登録文化財となりました。1929年（昭和4）、アメリカで起こった経済不況は、世界的な経済不況（世界恐慌）へと発展しました。この不況を中国への侵略によって切り抜けようとした日本は、1931年（昭和6）に満州事変を起し、さらに1937年（昭和12）に北京郊外での武力衝突（盧溝橋事件）をきっかけに日中戦争に突入、そして1941年（昭和16）には、アメリカやイギリスを相手にした太平洋戦争へと突き進みました。

太平洋戦争でも、佐世保は軍艦の修理、補給基地として重要な役割を果たしていました。そのため、アメリカ軍の攻撃目標となり、1945年（昭和20）6月29日には、空襲により市街地の大半が消失しました。城山町から本島町付近の中心部はほとんど被災して、消失した家は約12,000戸、死者は1,227人、また怪我をしたり家を失ったりした人は約6万人に達しました。八幡町の亀山八幡神社の参道には、このときの焼夷弾の落ちた跡が点々と残されています。直撃を受けた参道や石段は砕かれており、衝撃の大きさを物語っています。また、参道脇にある石灯籠は、火災の熱で表面が剥がれ落ちています。この一連の戦争で、日本の兵士や一般市民あわせて310万人の命が失われ、莫大な財産をも失って、1945年（昭和20）8月15日に敗戦国として終戦を迎えました。そして、日本が起こした戦争に巻き込まれた中国、朝鮮半島、そして東南アジアや南洋諸島などでも大きな犠牲が出ました。現在でも中国では、終戦時に日本軍が捨てて行った毒ガス弾による被害が多発しています。」

<戦争遺跡>

「太平洋戦争が終わって半世紀以上が経つが、市内には戦争の傷跡がまだいくつも残っている。特に戦争末期になって盛んに掘られた防空壕は市内各所に数多く残っている。最大のものとしては、旧宮村国民学校の生徒たちが掘った地下教室『無窮洞』や佐世保鎮守府跡の地下司令部壕などがある。また、敵機来襲に備えて造られた高射砲台の跡も弓張岳などに残り、焼夷弾の跡も八幡神社や山ノ田浄水場に残っている。これらの戦争の傷跡、いわゆる『戦争遺跡』は、戦争の経験者が少なくなりつつある今日では、過去の戦争を後の世代に語り継ぐための教材として全国的にも調査、研究が進んでいる。」

次回は、「戦後佐世保の再出発」と題して、戦後の復興などをご紹介します…。